

ポパーの三世界論において成長する知識とはどのようなものか

池田健人 (Kento Ikeda)

大阪大学

カール・ポパー (Karl R. Popper, 1902–1994) によれば、この世界は 3 つの部分領域に区別することができる。ポパーは、その 3 つの部分領域を、より基礎的なものから順に世界 1、世界 2、世界 3 と名づけた。世界 1 は、物理的対象ないし状態の世界である。これにかんするポパーの記述は、とくに動的なプロセス存在論に相当するものとして考えられてよい。それゆえ、この世界には、いまこの部屋のなかにある机やテレビなどのような中間サイズの対象ばかりではなく、寒暖や緊張などもまた含まれている。つぎに、世界 2 は、無意識の状態を含む意識の状態または心的状態、行動性向の世界である。注意しておくべきことは、さきの世界 1 の説明とは異なり、世界 2 の説明においては、対象ということばが用いられていないという点である。ポパーは、たとえば魂などのような、何らかのかたちをもった精神的な対象は想定していない。あるのは、ただたんに状態や性向のみである。そして、世界 3 は、思考の客観的内容の世界である。ここには、理論や問題、推測などが含まれている。ただし、この世界は、普遍的概念をめぐる論争に寄与することを目的として提案されたものではない。ポパーによって提出されたこのような理論は、三世界論と呼ばれている。

三世界論のなかでも、とくに多くの批判を集めているのは世界 3 である。これまで、世界 3 にはさまざまな困難のあることが指摘されてきた。そのなかでも、今回は知識の成長という概念に焦点を当てる。ポパーによれば、私たちの知識は成長している。より詳しく三世界論を調べてみると、この主張は、一見したところ妥当なものであるようにみえる。しかし、実際は、そのことによってポパーが具体的には何を意味していたのかは明らかではない。とくに、ポパーはその著作のなかで、成長という概念を、知識のみばかりではなく世界 3 そのものに対しても適用しており、彼自身においてさえ、概念的な混乱があったという可能性すらある。それゆえ、知識の成長にかんする問題は、多くの研究者らによって、世界 3 をめぐる問題のなかでもとりわけ熱心に議論がつづけられてきた。

本発表の目的は、知識が成長するといわれるときの知識とは具体的にはいったいどのようなものであるかを考察することである。すでに述べたように、この問題にかんしては、これまでいくらかの研究の蓄積がある。たとえば、世界 3 は、定義上、その概念のうちに知識の成長を含むことはできないとする反論や、世界 3 の概念を正しく分析すれば、私たち人間の断言に注目することによって、知識の成長はありえるとする擁護などがある。それゆえ、本発表では、これらの議論を紹介し、その妥当性について批判的に検討することを通じて、ポパーの三世界論において成長する知識がどのようなものかを明らかにする。